

博士論文審査結果の要旨

学位申請者 伊藤 陽里

主論文 1編

Survey of severe respiratory syncytial virus infection in Kyoto prefecture from 2003 to 2007.

Pediatrics International 52; 273-278, 2010

審査結果の要旨

RSウイルス (Respiratory syncytial virus ; RSV) は乳幼児期の呼吸器感染症の主要病因ウイルスで、その感染症の1~3%は重症化し、とくに早産児や高齢者では呼吸不全による死亡例もみられる。しかし、重症RSV感染例 (以下重症例) に関する疫学研究は少なく、臨床的特徴も未だ十分には明らかにはされていない。

申請者は、入院後気管内挿管を要した例または来院時心肺停止例 (cardiopulmonary arrest on arrival; CPAOA) を重症例と定義し、その臨床像を明らかにするため、京都府内の小児科病床を有する病院を対象に5年間調査を行った。192病院中188病院より回答を得 (回答率97.9%)、5年間に京都府内16病院で25例の重症例が確認された。二次調査で詳細な情報が得られたのは25例中21例 (気管内挿管例18例, CPAOA例3例)、うち男児12例 (57.1%)、女児9例 (42.9%) であった。発症時年齢は日齢8~19歳 (平均5.2か月, 中央値2か月) に分布し、66.7%は3か月未満の乳児であった。在胎週数についての回答があった15例中12例 (80%) は36週以降出生の正期産児であった。初発症状は咳嗽 (76.2%)、鼻汁 (76.2%) が多く、発熱 (33.3%) は比較的少なかった。21例中15例 (71.4%) が細気管支炎を発症しており、無呼吸発作を11例 (52.4%) に認めた。さらに生後3か月未満児の無呼吸発作合併率は64.3% (14例中9例) で、生後3か月以上の児の合併率14.3% (7例中1例) と比べ、より多い傾向にあった。以上より、生後3か月未満のRSV感染症では、無呼吸発作に留意し、迅速診断と早期治療に努めるべきと考えられた。同時期にRSV感染症で入院し、酸素投与を必要としなかった18例を軽症例として重症例と比較したところ、重症例では細菌感染の合併率、末梢血白血球数、血清血糖、血清LDHの各値が有意に高く、血清Na値は有意に低かった。重症例21例中軽快退院は14例 (66.7%)、死亡例は4例 (19.0%) で、後遺症 (低酸素性脳症、反復性喘鳴) は2例 (9.5%) に認めた (1例は転院のため詳細不明)。死亡4例のうち2例は突然死例であり、乳幼児のCPAOA症例には潜在的にRSV感染が含まれる可能性が示唆された。抜管が可能であった16例中、基礎疾患のない14例は2週間以内に抜管され、うち13例は後遺症なく良好な経過を取った。初発症状出現から急激に呼吸状態が悪化し、挿管された7例の挿管期間は7~114日と長い傾向があった。

以上が本論文の要旨であるが、乳幼児では致死的経過をたどる危険性があるRSV感染症の臨床像を詳細に集積・解析し、重症化予防への基礎データとした点で、医学上価値ある研究と認める。

平成25年9月19日

審査委員 教授 奥田 司 ㊞

審査委員 教授 田尻 達郎 ㊞

審査委員 教授 細井 創 ㊞